

ロマン連合の分裂

——第一インターナシヨナル分裂の先駆け——

渡辺 孝次

はじめに

第一インターナシヨナルの歴史において、組織の内部で展開されたマルクスとバクーニンの対立・抗争が重大な意味を持ったことは周知であろう。そして、この抗争の核をなしたものが、一八六八年九月にベルンでバクーニンらが結成した「国際社会民主同盟 Alliance internationale de la Démocratie socialiste」(以下「同盟」と略示)であった。この組織がどのような

経緯を経てインターナシヨナル加入を認められたか、また、それが本拠であるジュネーブでは次第に孤立し

反発される存在になっていったのに対し、他方のジュラ地方では強い支持を見出し、そのことによって、スイスのフランス語域に結成された「ロマン連合 Fédération romande」の内部に分裂の兆しが生じたことはすでに先行する二論文で述べた⁽¹⁾。本稿の課題は、ロマン連合に関する考察を締めくくるために、この組織に生じた動きがどのような結末に行きついたを描き、同時に、それがインターナシヨナルのその後の運命にどのような影響を及ぼすことになったかを考察することにある。

先回りして言えば、この作業を行なうことの意義は主として二つある。その第一は、ロマン連合内部で争

われた争点と、後にインターナシヨナル全体を舞台として争われた争点には共通点が多かった——両方とも、同盟派の主張した「政治的棄権主義 abstentionisme」〔ブルジョワ政治〕への参加の拒否、特に議会主義の拒否〕と、「秘密の同盟」の展開した秘密結社活動、が主要な争点であった——ため、ロマン連合に生じた内紛は、インターナシヨナル全体にその後を生じた対立を先取りしていたことである（実際バクーニンは、この内紛の総決算とみなしうる、後述するラ・シヨード・フォン大会を「来るべき総決戦の前哨戦」と捉えていた⁽²⁾）。

第二は、この内紛の渦中で生じた諸事件に対する考察を抜きには、マルクス率いる総評議会が「同盟問題」に関与を始める理由が十分解明されないことである。この点に関してこれまでの通説が重視してきたこと、すなわち、一八六九年九月にバーゼルで開かれたインターナシヨナルの大会で「バクーニン派」が「勝利」を収めたことは、実際にはマルクスにとってさしたる重要性を持たなかったと考えられる⁽³⁾。それよりも、理

由としては(1)同盟の容認しがたい活動の証拠をマルクスが見つかったこと、(2)それまで彼に同盟攻撃を思いとどまらせていた理由と思われる、彼の古くからの友人であるJ・Ph・ベッカー Becker への配慮がもはや不要であることをマルクスが知ったこと、(3)N・ウーチン Outline という協力者をマルクスがジュネーヴに得たこと、の方が重要であったと思われるが、これらはずべてこの内紛の渦中で生じたのである。また実際にマルクスが同盟攻撃のキャンペーンを公然と開始したのもこれらの事件が起こった直後であった。

このような理由により、分裂に至るロマン連合の動きを詳しく考察することは、インターナシヨナル全体にその後を生じた動きを理解するために極めて重要である。にもかかわらず、この過程の詳しい考察は、少なくともわが国においては現在に至るまで行なわれていない。本稿は、まず、この研究史上の空白を埋めることを目指すものである。また、それに加え、叙述の過程で、マルクス主義のサイドに偏りすぎてきた観のある従来の叙述に見られる一面性がある程度正すこと

も目指したい。

一 バクーニンなき後の同盟とジュネーヴ支部

(一) ロバンとペロンの孤立化

バクーニンは、かなり早い時期から、バーゼル大会後にジュネーヴを去るつもりだと予告していた⁽⁴⁾。その理由は主として個人的なものであり、インターナショナルをめぐる問題とはさしあたり関係ない⁽⁵⁾。彼のこの計画は、パリの『レヴエイエ』紙に彼を攻撃するM・ヘスの記事が載った事件によって延期されたが、十月三〇日には実行された⁽⁶⁾。これ以降彼は、スイスのイタリア語圏をなすカントン・ティチーノの町ロカルノに住んだのであり、十一月以降にジュネーヴで起きた事件に直接は関与していない。この事実には、留意が必要である。

バクーニンが去った後、同盟支部の運営とロマン連合の機関紙である『エガリテ』紙の編集を受け継いだのはCh・ペロンとP・ロバンであった。しかし、この二人にはバクーニンのようなカリスマ的な魅力はなく、

ロバンはパリの高等師範出身のインテリであったが、ギョームによれば細事にこだわりすぎる面と、人を揶揄する悪い癖を持っていた⁽⁸⁾。一方ペロンに関するバクーニンの評価は、冷淡な印象を与え、また建築労働者を軽蔑する傾向がある、というものであった⁽⁹⁾。

同盟支部に関する考えも、この二人はバクーニンとはまったく異なっていたようである。すなわち、バクーニンの目指した、建築労働者を対象とする個人的なオルグ活動を通して、ジュネーヴ諸支部の指導を牛耳る時計工グループ (La Fabrique) と対抗しうる勢力を同盟支部に結集する、という方針は彼らの関心を引かなかった。それよりも、この二人はむしろ、時計工グループとそれ以外の労働者の勢力 (bros metiers) を和解させることが重要と考え、そのために諸支部をまとめる全体会を毎週開くという方針を採ったのである⁽¹⁰⁾。同盟支部が、ジュネーヴ支部全体を革命化するという特別な任務を帯びていると考えるのではなく、全支部を集める正規の集会を重視したのであるから、この二人の方針はバクーニンの考えとはまったく異なる

つて⁽¹²⁾いた。

このように、この二人は同盟支部に固有の存在理由を認めなかったから、彼らがその指導に不熱心だったのも当然であった。バクーニンは、後年に書いた記録の中で、この二人が同盟支部をだめにしてしまったと苦言を呈している⁽¹³⁾。実際には、ジュネーヴにおける同盟の衰退はすでにバクーニンが去る以前から生じていた⁽¹⁴⁾からこの指摘には誇張があるが、一八七〇年一月二三日に開かれた同盟支部一般集会への出席者が、新年度への役員を選ぶという重要な会であったにもかかわらず⁽¹⁵⁾十六名にとどまったことも事実であった。

二人の下では、『エガリテ』紙の編集方針も変化した。和解を求めるロバンとペロンは、対立を避けるため、時計工代表のグロスランが急進派のリストで立候補していた十一月十四日のジュネーヴの閣僚 (Conseil d'Etat) 選挙までは議会主義に関する言及を控えた。ところが、にもかかわらずグロスランは結局落選した。この結果をふまえ、十二月四日の同紙は労働者の代表を議会に送ろうとする試みを無益とする記事を

載せたが、これが原因で『エガリテ』紙は再び時計工グループと対立に陥⁽¹⁶⁾った。

かくして、一方では建築労働者のグループを重視するのをやめ、他方では時計工グループの支持を得るのにも結局は失敗したため、ロバンとペロンは両方のグループから次第に孤立していった。このような中で、八月に連合委員を辞任したプロッセに代わって委員を務めており、同盟支部の中心人物の一人でもあったF・エングが仕事の関係で十一月七日にジュネーヴを去り、その後任にF・ヴァイヤーマン Weyermann が選ばれたこと⁽¹⁷⁾、また、後述する『エガリテ』事件によってThデュヴァル Durval が反対派に接近したことを通して、ロマン連合委員会は今や完全に反同盟派の手に落ちてしまった⁽¹⁸⁾。かつてジュネーヴで隆盛を誇った同盟支部も、こうしてこの町ではほとんど名ばかりの存在になった。同盟の支持勢力は、六九年末には完全にジュラ地方に移った。

(二) ウーチン登場

これ以降ハーグ大会に至るまで、マルクス・バクー

ニン關係に重要な役割を果たすロシア人亡命者のウーチンがジュネーヴの運動に関与し始めるのは、このような背景の下においてであった。バクーニンの名聲に惹かれて、彼は一八六七年秋の「平和自由連盟」結成大会ではさかんに「バクーニン派」を自認して回ったが、⁽¹⁹⁾レマン湖畔の町クラランの「ロシア人・サークル」で翌年初めから開始された九ヶ月に及ぶ共同生活は、彼とバクーニンの關係を悪化させた。さらにバクーニンは、この年秋に出されたロシア語の雑誌『人民の事業』第一号の編集にウーチンを加えず、また国際社会民主同盟の結成をめぐる協議からも彼を排除した。これらの事件は、ウーチンのバクーニンへの敵意を生んだ。⁽²⁰⁾

六九年十月末から、ウーチンはジュネーヴ諸支部の全体会に出席し始めた。しかし、参加早々に、イギリスのトレイド・ユニオンを賛美する発言をして、出発間際のバクーニンが、それは体制内改革しか望んでおらず、その意義は賃労働の廃止を目指すインターナショナルには到底及ばないと論破する一幕が生じた。⁽²¹⁾

の事件は、ウーチンのバクーニンに対する敵意をさらに強めたと考えられる。バクーニンはこの会を最後にジュネーヴを去ったが、かねてよりウーチンを嫌悪していたから、去るにあたってロバンとペロンにウーチンには気を許すなと警告した。しかし、ペロンは「人ではなく原理が問題のはずだ」と取り合わず、バクーニンもそれ以上言うのは諦めてしまった。⁽²²⁾そして、この後まもなく、ウーチンは『エガリテ』紙の編集に加わることになる。⁽²³⁾後述するロシア人支部の評価とも関連し、彼の労働運動史上の意義をどう評価するかは論の分かれるところであるが、⁽²⁴⁾彼が渦中に入ったことで、ロマン連合のレヴェルでもインターナショナル全体のレヴェルでも、同盟をめぐる対立がこれ以降増幅され激化したことだけはまちがいない。

二 『エガリテ』をめぐる事件とマルクスの対応

ジュネーヴ支部がこのような状態にある時に、『エガリテ』紙をめぐる三つの事件が生じた。それらは

同盟に対するマルクスの態度を変化させたが、特に、編集部の交替に終わった最後の事件はマルクス・バクニン問題にも様々な波紋を投じた。以下それらを順に見る。

(一) 『エガリテ』紙の総評議会批判

この事件の責任は、当時の同紙の編集長ロバンに帰せられるが、事件は、細事にこだわらすぎるといふ前述した彼の性格を反映していた。

「インターナショナルの大会では、第一回大会以来一貫して総評議会の会報発行義務が確認されている。にもかかわらずこの義務は一度も果たされていない。正式の会報でなくとも、単なる各国支部への通知でも良いのである。総評議会はこの義務を果たすべきではないか」。これが十一月六日の『エガリテ』紙に載ったロバンの記事の要旨であった。これに続けて彼は次号でもこの問題に触れ、さらに、この義務が果たされないのは、総評議会が同時にイギリス連合の本部を兼任しているためであろうと論じ、イギリスにも他国と同様に国内的な連合評議会を設けるべきだと結論づけた。

これにとどまらず、彼は一ヶ月後には、フィニアンの大赦を求める運動を支持する総評議会の決議を掲載した後、むしろこれを自分の主張の正しさを証明する材料として用い、一ヶ月前の呼びかけが何の効も奏していないのは、総評議会がこのようにイギリスばかりに関わっており、国際面の業務を怠っているからであると批判した。⁽²⁵⁾ さらに、その際にドイツのいわゆるリーブクネヒト・シュヴァイツァー問題が取り上げられ、これに関してジュラの機関紙『プログレ』が引き合いに出されたため、同紙もまたこの問題に巻き込まれることになった。『プログレ』紙の主張は次のような主旨であった。ラサール派とアイゼンハ派のどちらがわが協会の原理に忠実なのか。リーブクネヒトは、バーゼル大会でシュヴァイツァーをビスマルクの共謀者と非難したが、土地問題に関する態度ははなはだ曖昧であった。そして今日では、土地の共同所有を求めた大会決議の承認を拒否している。一方、シュヴァイツァーはこの決議に賛成しており、また反対派が自分に關して中傷をまき散らしていると抗議している。このよ

うに、ドイツの状況は混乱している。この問題に関しては、総評議会の調査が必要なようである、と。⁽²⁶⁾

この一連の記事に対する総評議会の返答は、一八七〇年一月一日付のロマン連合評議会への非公開通知である。⁽²⁷⁾ マルクスがそこで展開した反論のうちで、前の論点に直接関わるものを挙げれば、(1)総評議会との通信の権限は、本来ロマン連合評議会の書記にのみあるのであり、『エガリテ』紙がこれを代行するのは越権行為である。(2)同紙の主張する、会報発行に関する総評議会の義務規定は、インターナショナルの様々な機関紙がその役目を担っている今日意味を失っている。(3)イギリス問題に関しては、世界における資本主義の総本山であるこの国の特殊性を考慮すると、そのように重要な国の労働運動の指導をイギリス人だけの手に委ねるのは犯罪にさえ値する愚行である。(4)シュヴァイツァーリーブクネヒト問題に関しては、総評議会は過去二年間あらゆる手をつくしてスキャンダルの解消を試みたが、シュヴァイツァーは依然として総評議会の権威を公然と退けている、などである。

この文書に関してメーリングは「調子はするどいが、……事実には即した対決の節度を一貫してまもっている」と評しているが、この指摘は支持しうる。少なくとも、そこには同盟の名もバクーニンの名も出されてはいない。他方、三月末に書かれる第二の通知では事情が一変し、内容はバクーニンに対する露骨な個人攻撃になった。その事実と理由はすぐ後に述べる。

(二) デュヴァルの離反

『エガリテ』紙は、十一月六日以来ジュネーヴの指物師協会の歴史を扱うシリーズ記事を掲載していたが、二七日には、シリーズ第三回の記事を部分的に載せた後、同協会からまだ関連資料が届かない、責任者は怠慢である、とコメントしてこの連載を打ち切った。ロバンは、さらにこれに続く十二月十一日と十八日も同趣旨の警告を載せた。その結果、結局資料は二〇日に届けられたが、協会の責任者であるデュヴァルはこれらの記事に怒り、これ以降はロバンらに背を向けた。⁽²⁹⁾ 前述したように、彼はこの時点でも同盟を支持していた唯一の連合委員であったから、彼が離反したことに

よって、次の事件でロバンらを支援する者は委員会内に誰もいなくなつた。

(三) 『エガリテ』編集部の交替

この事件の発端も、ロバンの節度を欠く行ないにあつた。ロシア人亡命者であるA・セルノソロヴィエーヴィッチの自殺はジュネーヴ支部員の間にも強い同情を引き起こしたが、⁽³¹⁾彼が蔵書を寄贈したことにより、ジュネーヴ支部の図書館はその整理のため十月中旬以来休館となつていた。ところで、この状態が長引き十二月になつても開館されなかつたため、メンバーの間に次第に苦情が出始めた。そこでロバンは、早急に開館すべきだと紙上で主張した。これを見た図書館の責任者P・ヴェーリイ Wehry はロバンに弁明の手紙を送つたが、ロバンは取り合はず、次号にも「熱心な読者は今後も事態を遺憾に思い続けるであろう」と書いた。⁽³²⁾そしてこれがヴェーリイの強い反発を招いたのであつた。

この二番目の記事に怒つたヴェーリイは、『エガリテ』の編集委員会に強い抗議を行なつたが、その際攻

撃の度合がすぎたので、委員会は彼に辞任を求めた。彼が辞めないのなら、逆に他の委員全員が辞任すると委員会は脅した。しかし、ヴェーリイはこれに屈せず委員の座に固執した。そこで実際に七人の委員が辞表を出したが、これを好機とばかりにヴェーリイは、今や完全に反同盟派の手に落ちていた連合委員会に問題を持ち込み、辞表を出した七人の後任にウーチンらを決けてしまつた。⁽³³⁾ヴェーリイには編集能力はなく折れてくるだろう、とたかをくくつていたロバンら同盟派は、予期せぬこの展開に慌てたが後の祭りであつた。一方、それまで同盟支持であつたベッカーは、この時はロバンらと共に辞表を出したものの、その後まもなくジュネーヴ派に移つた。⁽³⁴⁾

(四) マルクスの態度硬化と同盟攻撃開始の真因

ロバンらがこの脅しの辞表を出した直後に、ジュネーヴ派のリーダーの一人で連合委員会書記のH・ペレは、総評議会のスイス担当通信員であるH・ユング Jung に事件を説明する手紙を出した。その中でペレは、バクーニンがジュネーヴを去つたこと、ペレの表

現では「権威主義者」の集団である同盟がジュネーヴに混乱を引き起こしていることに続けて、バーゼル大会への代表選出に關する次のような訴えを行なった。

「……同盟の連中のやり口がどんなものか分かってもらえさえしたら。言うことをきかない者を支部の中で中傷する、私やグロスランの代議権をつぶすためにあらゆる手段に訴える、……さらに彼(バクーニン)は、リヨンとナポリから全権委任を拝み倒して手に入るわと、まったく節操のかけらも見られないやり口なのだ。そうした上で、彼らはバーゼルで自分たちの陰謀の手筈を整えるために我々より先に出発した。……ヌーシャテル支部の代表はマルティノーだったが、ギヨームの兄弟の署名のあるこの支部の代議員証は実質物だった。我々にはその証拠がある。というのは、ヌーシャテル支部は当時まだ正式には結成されておらず、その暫定委員会は我々にギヨームもマルティノーも知らないと書いてきたからだ。これが同盟の使徒たちの品性なのだ。……」⁽³⁵⁾

このうちジュラに關しては、ヌーシャテル支部の代

議員証が本当に贋物だったかは定かではないが⁽³⁶⁾、ジュラに來たばかりのマルティノーに代議権を委ねることがはたして許されたかという疑問は確かに禁じえない。ジュネーヴに關しては、中傷云々の部分は除くとしても、ペレの訴えはおおむね正しかったであろう。ペレのこの手紙は、ユングの手を通してマルクスにも渡り、これが同盟に対する彼の態度を硬化させる直接の原因になったと思われる。なぜなら、次に挙げる証拠により、マルクスがこの手紙を重視したことは明らかだからである。例えば、一八七〇年一月二日付のエンゲルスへの手紙で彼がバクーニンの「権謀術策」に言及していること、続く二月十日にはこの手紙の写しをエンゲルスに送りさえしていること、また同年一月二四日付のベルギーのC・ド＝ペープ De Paeppe への手紙にもその抜粹を書き添えていることなどである。⁽³⁸⁾ この手紙が、国際社会民主同盟(国際組織として公然の同盟)の解散宣言にもかかわらず秘密の同盟が依然として国際組織として存在し続けたこと、そして、後者がインターナショナルの内部で秘密工作を行なったこ

と、を立証するものであったことを考えれば、マルクスがそれを重視したのも当然であった。⁽³⁹⁾

かくして、同盟を攻撃すべき機は熟した。残る問題は、同盟支持というマルクスらにとって困った態度をとっていた「老ベッカー」だけとなった。しかし彼は、おそらく一月一日の総評議会の通知が原因で反同盟派に移り、マルクスは、遅くとも七〇年三月二四日にはそれを承知するに至った。⁽⁴⁰⁾ これにより、同月二八日付のドイツ向け通知を書く準備が整ったといえよう。通知がドイツ向けであったことを考慮すると、ベッカーの「改悛」の事実はマルクスにとってかなり重要であったにちがいない。

最後に、マルクスがドイツ向け通知を書くことの第三の動機をなしたと思われる、ジュネーヴにおけるロシア人支部結成の経緯を説明しておこう。三月十二日にインターナショナル加入が申請され、早くも二二日には加入を認められたこの支部のロシア労働運動史上の意義をめぐっては論が分かれている。⁽⁴¹⁾ ⁽⁴²⁾ しかしその結成の経緯からは、数名のメンバーを急いで集めたとの

印象を禁じえず⁽⁴³⁾、また当面の目標ももっぱらバクーニンの攻撃にのみあったようである。⁽⁴⁴⁾ このように、結成当初のこの支部はどう見ても一種の泡沫支部でしかなかったが、マルクスはこれをジュネーヴにおける反バクーニン闘争の有効な武器とみなし、自身のロシア嫌いをおして、彼自身が総評議会のロシア担当書記になってほしいというウーチンらの依頼を早速引き受けさせた。⁽⁴⁵⁾

以上の三件が、一八六九年の終わりから七〇年三月末までに生じ、バクーニンに対するマルクスの態度を一変させたと考えられる事件である。一月と三月の二つの通知に関してメーリングが指摘する変化、すなわち、前者は事実在即す自制を保っているのに対し、後者には根拠を欠く個人攻撃が満ちていること⁽⁴⁶⁾の理由は、その間にこれらの事件が起こったことであろう。第二の通知がいかに多くの、事実と異なる叙述を含むかは、これに対するギョームの反論により一目瞭然である。⁽⁴⁷⁾ しかも、その多くはマルクス自身誤りと知りながらあえて事実を歪めているのである。例えば、ペレの手紙

によりマルクスは当然、『エガリテ』をめぐる事件とバクーニンが無関係であることを知っていたはずなのに、すべてをバクーニンと関連づけて説明し、のみならず、編集部を奪われたために彼がロカルノへ引⁽⁴⁸⁾込んだかのように描いていること一事を取ってもこのことは明らかである。この第二の通知をマルクスが書いたことは、批判の限界を越えており、まさに同盟攻撃の開始とみなすべき事件であった。

連合委員会と『エガリテ』編集部が反同盟派の手に落ちたことを確認したから、おそらくマルクスは、近々開かれる予定のロマン連合第二回大会における同盟派の敗北は確実であると予測していたであろう。しかし実際には、事態はマルクスの思惑とはまったく異なる展開を示した。そしてそれにより、最終的にはインターナショナル全体の分裂にまで連なってゆく、総評議会とバクーニン・ジュラ派の対立が確立されていくのである。

三 ロマン連合の分裂

(一) 分裂の模様

ロマン連合の第二回大会は、四月四日にジュラ地方最大の都市ラ・ショー・ド・フォンで開かれた。出席したのは、ジュネーヴの十九支部を代表する十三名、ラ・ショー・ド・フォンの三支部を代表する五名、ジュラ地方のこれ以外の十二支部を代表する二一名、の計三九名であった。⁽⁴⁹⁾このほかに、加盟を希望する支部として、ジュネーヴの社会民主同盟支部、ラ・ショー・ド・フォン「プロバンガンタ支部」、そしてクルトラリー地区の彫金工・斜子彫工支部の代表が出席していた。

開会早々に、早くも議事進行の方法をめぐって論争が持ち上がった。⁽⁵⁰⁾ジュラ派の代表は、最初加盟問題に決着を着け、承認された支部の代表も最初から討議に参加させるのが望ましいと主張した。これに対しジュネーヴ代表の多くは、前二支部の受け入れを連合委員会が拒否していることを理由に、この二支部の承認

問題を後回しにすることを主張した。ラ・シヨール・ド・フォンの「プロバガンダ支部」とは、ジュネーヴからこの町に移った同盟のかつての書記エングなどが、この地の改良主義的な「クルリー派」に対抗して結成した支部であった。⁽⁵¹⁾ 討議の結果、問題のないクルトラリーの支部の加盟が全会一致で承認されたが（この結果、ジュラ派の代表は一名増え計二二名になった）、残る二支部の承認をめぐるは対立が続いた。討議が紛糾したために採決になったが、十九対十九でこれでも決着が着かず、結局議長J・B・デュプレ Duplex の権限で、まず連合委員会の活動報告を聞くことが決定され午前の会は閉会した

この決定を受け、午後の会は連合委員会の報告で始まった。しかし、その中で、委員会が前記二支部の承認を拒否したことも報告されたから、それをめぐって再び激論が開始された。そして、その過程で同盟支部に対するジュネーヴ派の非難が噴出した。例えば、かつては同盟支部の幹部であったシ・ゲタ Guétat は、「同盟に、公的な委員会のほかに秘密の委員会が存在

することはジュネーヴでは知らない者がいないほど周知である。……その大親分であるバクーニンは、全世界との秘密の糸を握っていたに違いない。そして我々はしばらくすると、卑劣なやり方で騙されていることに気づいた。……同盟の主目的は、あらゆる所に、すなわちインターナショナルのすべての機関に、バクーニンの息のかかった同盟員を配属して、ジュネーヴのインターナショナル全体を彼の気まぐれに従って指導することである。」等の激しい非難を行なった。この主張は、バクーニンの秘密結社活動を、それから排除された者の目から見た指摘として注目に値する。これに対してはギヨームが、国際組織としての同盟は解散したはずではないかと反論を行なったが、ゲタは「ノン！」と答えている。またデュプレやヴァイヤーマンは、同盟が無神論や家族の廃止というような労働者の賛成しない原理を説いていると批判した。⁽⁵²⁾ さらに、この時点でも依然同盟に属していたデュヴァルも、同盟の一般的な意義やその掲げる原理には賛成であるが、ロマン連合に対してはそれは害にしかならないと主張

した。また連合委員会書記のペレは、同盟のインターナショナル加入を総評議会が承認したのは、ロマン連合委員会がその加盟を拒否したことを総評議会が知らなかったからであろう、同盟は労働者の要求を考慮せず純粋に革命的なプロバンガンダのみを行なっており、ロマン連合に分裂しかもたらさないと主張した。

最後に、反バクーニン・キャンペーンの急先鋒であるウーチンは、かつて自分もそれに加わろうとした事実を棚上げして、⁽⁵³⁾同盟はブリュッセル大会が存在理由を否定した平和自由連盟の私生児にすぎないとし、また、ネチャーエフとの共同執筆の成果である文書⁽⁵⁴⁾を根拠として、バクーニンがロシアの革命運動に重大な害をふりまいていると告発した。

これらの非難に対するジュラ派の反論を詳述するのは控えるが、このジュネーヴ派の主張から、組織問題としては同盟をめぐる両派の対立は和解の余地のないところまで先鋭化していたことが分かる。そこで、ひとしきりの論争の後に討議は打ち切られ採決に入った。⁽⁵⁵⁾結果は、加盟賛成が二一名、反対が十八名、で加盟承

認となった。しかし少数派は、この結果を不服として会場から退場しようとした。ところが、この時会場となっていたラ・シヨード・フォンのインターナショナル会館がたまたまクルリー派のU・デュボア Duboisの所有物であったことから、彼は逆に多数派の退場を要求し、これがクルリー派の「集産主義者は出ていけ！」の合唱を引き起こした。⁽⁵⁶⁾多数派はやむなくこれに従い、かくしてロマン連合の分裂は完了した。そしてこれ以降は、両派が別々にこの第二回大会を続けることになったのである。

(二) 政治活動の意義をめぐる両派の見解

このように、ロマン連合は直接的には同盟支部の加盟をめぐる分裂したが、反同盟派とジュラ派の立場の違いは原理問題においても明らかであった。そのことを、政治活動の意義に関する両派の決議に見る。

まずジュラ派の決議の要旨は次のようであった。すなわち、あらゆる政府および国家はブルジョワジーという搾取階級の組織にはかならず、ブルジョワ政治への参加は、現体制の強化とプロレタリアートの社会主

義的革命運動の麻痺しかもたらさない。したがってインターナショナルの諸支部は、ナショナルな政治改革を通して社会変革を目指すような活動には参加を断念するべきであり、もっぱら、同職集団の連合組織の結成を目指すべきである、というものであった。⁽⁵⁷⁾

他方同盟派の決議は、そのような政治的棄権主義を有害であると退けた。しかしこの派も、労働者の代表を立法府や行政府に送り込むことを万能薬のように捉えていたわけではなく、それを、単に社会革命を目指すアジテーションの一つとみなすにすぎない、換言すると、労働者階級の解放がそれによってもたらされる⁽⁵⁸⁾とは考えない、と表明した。さらに、この決議の趣旨は、同年六月初めにドイツの社会民主労働者党がシユトウツトガルト大会で下した選挙に関する決議と同じであった。⁽⁵⁹⁾後にロンドン協議会で、労働者の代表を議会に送ることの意義として、マルクスもまた「プロバガンダ効果を第一としたことを考えると、反「棄権主義」の立場であっても、この時期の主流は、労働者代表が議会で過半数を占めることや、それを通して改革

を推進することなどを目指すものではなかった点に注意する必要がある。

(三) 分裂をめぐる総評議会の裁定

ともかく、ラ・ショード・フォン大会でロマン連合は分裂した。大会の後にはジュラ派もジュネーヴ派も、直ちにロンドンの総評議会に経過を知らせる手紙を送った。⁽⁶¹⁾総評議会は、当初は純粹に中立的な態度を装う一方で、通信等の事務的な面では分裂以前(S. P. Langton)に基づく立場をとった。しかし、ロマン連合の旧書記ベレはジュネーヴ派の中心人物であり、分裂した両派の新しい書記ではなくベレのみと通信を行なうという総評議会の方針は、結果的にはジュネーヴ派のみと通信をするということの意味していた。⁽⁶²⁾

その後六月二十八日に、総評議会は、ラ・ショード・フォン大会におけるジュラ派の多数は名目にすぎず、ロマン連合委員会の正統的な後継者はジュネーヴ派とみなされるべきであり、ジュラ派がラ・ショード・フォンに新設した連合委員会は、ロマン連合委員会とは別のローカルな名称を採るべきであるとする決

定を下し、翌日それを兩派に通知した。ジュラ派の多数が名目にすぎないとの判断の理由は、ウーチンの執筆した、ジュネーヴの委員会の代表するメンバー数は二千名に達するのに対し、ラ・ショー・ド・フォンの委員会の方はわずか六百名ほどの会員を代表するにすぎない、とする報告であった。⁽⁶³⁾しかし、総評議会のこの決定はロマン連合の自治を否定するものであった。なぜなら、確かにバーゼル大会で下された運営決議によって支部間の紛争を裁定する権限が総評議会に認められたとはいえ、⁽⁶⁴⁾ジュラ派の多数派としての正統性はロマン連合規約によって明白だったからである。すなわち、ほかならぬ連合規約そのものが、どの支部も連合大会には代表各二名を送りうると明記しており、かつ、代表を送らなかつた支部には後で大会決議に抗議をする権利はないと定めているからである。⁽⁶⁵⁾

メンバーの実数においてジュネーヴ派にはるかに及ばなかつたジュラ派が、大会において多数を占めることができた理由は、何よりも、大会を前に彼らが抱いた危機感に帰せられる。すなわち、前年夏に改良主義

的なラ・ショー・ド・フォンのクルリー派と手を切つたジュラ派にとっては、⁽⁶⁶⁾ジュネーヴ派が陣営固めのために大会前にこのクルリー派と手を組み、のみならず、ラ・ショー・ド・フォンの代表の一人にはかなならぬP・クルリーを指名したことは、ギョームがいうようにまさに宣戦布告を意味するものだったからである。⁽⁶⁷⁾このように挑戦されたからこそ、ジュラ派は大会に少しでも多くの代表を送る意志を固めたのであり、支部が二名の代表を大会に送りうるという規定を活用して、出席したジュラ十二支部の多くが二名の代表を送つたのである。

理由としては、さらにバクーニンの影響を見逃すこともできない。すなわち、彼はこの大会をインターナショナルの次期大会で交わされる総決戦の前哨戦とみなして、「親友団 *intimé*」のリーダーたちにジュラ派への支援を訴えたのであり、また、同盟支部とプロバガンダ支部の加盟問題こそが最初に決着をつけられねばならないとする彼の指示は、⁽⁶⁸⁾ギョームらによって忠実に実行に移されたのである。しかし、ラ・ショー・

ド・フォン大会にバクーニンが間接的に（彼自身は大会に出席しなかった）⁽⁶⁹⁾ 関与したことは事実としても、後年になってマルクスらが広めた、この大会においても同盟派が代議権工作を行ない、一部には架空の代議権を行使したとの主張には根拠がないことも忘れてはならない。

いずれにしても、ジュネーヴ派を正統とするという総評議会の裁定は、インターナショナルのその後の歴史にとって重大な意味を持つ決意をジュラ派に固めさせた。すなわち、彼らはここで初めて総評議會を批判し始めたのである。『エガリテ』紙上の総評議會批判は、前述のようにロバンに帰すべきものでありジュラから発せられたものではなかった。また、ドイツ向けの総評議會の通知に書かれた、『プログレ』紙が『エガリテ』と並んでアイルランド問題に関する総評議會の決議を批判した、との叙述は正しくなく、実際には『プログレ』は十二月十一日号でこの決議を支持すると表明していたのである。⁽⁷⁰⁾ したがって、ジュラから総評議會に対して批判が発せられたのは、『プログレ』の

後を継いだジュラ派の機関紙『ソリダリテ』紙の七月二三日号が最初なのである。

この号で展開された批判の主旨は、問題の根は総評議會が考えているように「ロマン連合」というタイトル⁽⁷¹⁾の継承権にあるのではない。両派和解の助けになるのであれば、機関紙「エガリテ」の名を譲ったように「ロマン連合」のタイトルも譲ってもよい。しかし、それはあくまでジュラ派が自発的な意志によって行なうのであり、彼らは決して何らかの権威筋によってそれを「押しつけられる」ことを許さないのである、という内容であった。⁽⁷²⁾ つまり、批判の根本に支部の自治権が置かれ、この自治権を侵し支部間の問題に権威をもって干渉したことが、総評議會の犯した「重大な過ち」とされたのであった。こうして、支部・連合の自治の権利に基づきこの立場から総評議會の権威を否定するという、後に「反権威主義」陣営によって展開されることになる主張の先駆けがここにおいて発せられたのであった。

おわりに

以上本稿は、ロマン連合の内紛と分裂を経て、マルクス率いる総評議会とバクレーニン⁷⁴ジュラ派の対立図式が確立してゆく過程を描いた。通説との関連で強調すべきは、(1)マルクスの同盟に対する強硬姿勢は、一八六九年九月のバーゼル大会の結果によってではなく、七〇年に入って固まったと考えられること、(2)その主要因は、秘密の同盟が依然国際組織として存続しており、それがバーゼル大会を前に代議権工作を行なったという事実を彼が知ったためと思われること、(3)三月末に彼がドイツ向けに出した通知は、彼による同盟攻撃の開始を示すものと考えられること、などである。

このドイツ向けの通知を出した直後であったから、ラ・ショー・ド・フォン大会を前にマルクスは、同盟とジュラ派が排撃されねばならないとする強い決意を固めていたと考えられる。ところが、大会の展開は彼の期待を大きく裏切り、ジュラ派の多数を認めた。そのため総評議会は、公正さを犠牲にしても、あえて

常派的性格の強い裁定を下さざるをえなかったのである。⁽⁷⁴⁾

このことは、インターナショナルのその後の歴史にとって決定的に重要であった。なぜなら、連合規約に照らしてジュラ派の多数が正当であっただけに、総評議会の裁定は支部・連合の自治権を侵し、その態度は「権威主義的」であるとする異議申し立ての余地を残したからである。そのために、同盟の掲げるスローガン(国家権力の破壊や棄権主義など)の擁護ではなく、支部の自治権の防衛という点に争点に移り、後のいわゆる「反権威主義」陣営がその目的で団結するという展開が可能になったのであった。そのことは、総評議会が同盟だけでなくジュラ派をも敵に回したことの痛い代償であった。

ともかく、こうして総評議会とバクレーニン⁷⁴ジュラ派の対立図式は確立した。そして、自分たちの連合規約を無視した裁定を下されたことにより、ジュラ派は総評議会の「権威主義」を批判するようになった。しかし、ジュラ派の批判はさしあたりは全面的には展開

されなかった。なぜなら、問題が発生してまもなく普
仏戦争とバリ・コミューンという大事件が連続して起
こり、ジュラ派もまたこれらの事件の展開に完全に注
意を奪われたからである。バクーニン・ジュラ派と総
評議会の対立が全面化するのには、これらの諸事件にあ
る程度けりが着く一八七一年夏以降であり、具体的に
は同年九月のロンドン協議会、同年十一月のソンヴェ
リエ大会、そしてさらに翌年九月のハーグ大会を通し
てであった。

(1) 拙稿①「社会民主同盟とロマン連合」『一橋論叢』
第一〇四巻、第二号、七六一九二頁、②「バクーニン
とジュラ支部」『同』第一〇五巻、第二号、七六一九五
頁。

(2) 註六八に挙げたA・リシャルへの手紙参照。

(3) マルクスが同盟の「危険性」を痛感した理由を、
バーゼル大会において、バクーニンの支持した相統権
の廃止案がマルクスの起草した総評議会案よりも多く
の支持を得たことに見る通説の代表はC. M. Sekloff,
History of the First International, (1928), rpt. New
York 1968, p. 144; E. H. カーク著、石上良平訳『カ
ール・マルクス』未来社、一九六一年、二八四—二八

五頁、同著、大沢正道訳『バクーニン』現代思潮社、
一九七〇年、四九七頁、H・M・ビルーモヴァ著、佐
野努訳・左近毅解説『バクーニン伝』下、三一書房、
一九七三年、八〇頁、などである——この説の源は、
実はバクーニン自身であったと考えられる。Cf. "Ré-
ponse du citoyen Bakounine", *Bulletin de la Fédéra-
tion jurassienne...*, Nos 10+11, 15, 6, 1872——。これ
に対しメーリングは、すでにこれらの古典が書かれる
以前に、大会後にマルクスが娘のラウラに、大会の結
果にはば満足した旨の手紙を書いた(『マルクス・エ
ンゲルス全集』大月書店(以下『全集』と略示する)
三二巻、五二二頁)ことを理由に、この件はそれとは
無関係であると主張している(F・メーリング著、栗
原佑訳『マルクス伝』3、国民文庫、大月書店、一九
七四年、五六頁)。したがって「相統権」説は説得力に
乏しい。しかし、メーリングが暗示していること、す
なわち、ウィチンがマルクスにバクーニンの悪口を書
いたことがマルクスの同盟攻撃を引き起こしたとする
説(同書、六九—七〇頁)も説得力に乏しい。この問
題の解明には、ここで挙げた、内紛の渦中で生じた三
件を考慮に入れることが不可欠と思われる。

(4) "L'Alliance de la démocratie socialiste. Procès-
verbaux de la Section de Genève (15. 1. 1869-23.

12. 1870”, Textes présentés par Bert Andréas et Miklós Molnár, in : Jacques Freymond éd., *Études et Documents sur la Première Internationale en Suisse*, Genève 1964, p. 167. この史料によれば、彼は八月十三日にこの旨を同盟支部のメンバーに知らせた。
- (5) 理由は、妻のアントニアがイタリヤ人ガングブッチの子供を身いもったことでもあった。 Cf. James Guillaume, *L'Internationale. Documents et souvenirs (1864-1878)*, Paris 1905-1910, 4 tomes, rpt. vol I (t. 1+2), Genève 1980, vol II (t. 3+4), Paris 1985 (以下 *Guillaume* と略す), t. 1, pp. 181, 261 ; vol I, p. XLVII.
- (6) ヘスの記事に関しては、外川維男・左近毅編『バクレーニン著作集』4、白水社、一九七三年、三二九—三七四頁参照。転居の日付に関しては、バクレーニン自身が、十月二十八日にゲルツェンに「明後日ルガーノに行く」と書いており (Michel Dragomanov éd., *Correspondance de Michel Bakounine. Lettres à Herzen et à Ogareff (1860-1874)*, Paris 1896, p. 288) 続々十一月二日には、オガリョフにロカルノに到着した旨を知らせている (*Ibid.*, p. 283——ネットラウが指摘するように、その日付「十月二日」は「十一月二日」の誤りであろう)。Max Nettlau, *Michael Bakounin. Eine Biographie*, (London 1896-1900), rpt. Milan 1971, S. 380, Anm. 1924——)。
- (7) キヨームによれば、バクレーニンは最初カントン・ティチーノのもう一つの中心都市ルガーノに赴いたがこの都市がマツツィーニ派の拠点であったため、友人たちの助言に従いロカルノに切り換えた。 *Guillaume*, t. 1, p. 259.
- (8) *Ibid.*, pp. 225, 248. バクレーニンの評価ゆえには、*同*と略す。 *Michel Bakounine. Œuvres* (以下 *Œuvres* と略す), VI, Paris 1913, pp. 248-249.
- (9) *Œuvres*, *ibid.*
- (10) *Ibid.*, pp. 245-247, 255 ; “Assemblée générale du 20 octobre”, *L'Égalité*, 23. 10. 1869.
- (11) 詳しくは、前掲拙稿①七九—八二頁参照。
- (12) バクレーニンは、この二人の方針が、バーゼル大会に向けて秘密の同盟が展開した秘密工作と関係があったこと (つまり、「秘密工作」 「陰謀」に対するメンバーの非難をかむすために二人が正規の集会を重視した) をいおわせている。興味深い指摘である。 *Œuvres*, VI, p. 247.
- (13) *Ibid.*, 245-251. バクレーニンは、早くも六九年十二月四日にはこの二人に期待しなくなっていた。 Vgl. N. Rjasanoff, “Bakuniana”, *Archiv für die Geschich-*

te des Sozialismus und der Arbeiterbewegung, 5. Jg. 1915, S. 194.

- (14) 前掲拙稿①八五―八七頁、②八三―八四頁参照。
(15) “*L’Alliance...*”, *op. cit.*, p. 176. ロマンはこの一月二三日の会には出席し、二月六日にパリに向けてジュネーブを去った。*Ibid.*, p. 220, n. 67.
(16) *Guillaume*, t. 1, pp. 237-240; “La représentation du travail”, *L’Égalité*, 4. 12. 1869.
(17) “Aux comités des sections”, *L’Égalité*, 13. 11. 1869. プロッセの辞任とエングがその後任に選ばれたことについては *Guillaume*, t. 1, p. 183.
(18) *Guillaume*, t. 1, p. 230. 連合委員会は、プロッセ、シユナ、デュヴァル、ゲタ、マルタン、ペレ兄弟（うちマルタン以外は同盟員）の七人で発足した（拙稿①註三四参照）。その後八月にプロッセがエングに交替し、さらに十一月には彼がヴァイヤーマンと交替したのであった。もと同盟員であったゲタ、ペレ兄弟がバーゼル大会までに反同盟派になったことは確かだが、シユナがなぜ、またいつ同盟に背を向けたかははっきりしない。
(19) *Œuvres*, VI, p. 270; 前掲『バクターニン著作集』
(20) *Œuvres*, VI, pp. 270-272. さらに左近毅①「バクター

ニンとネチャーエフ第一インターナショナルへの波紋―」金子幸彦編『ロシアの思想と文学』恒文社、一九七七年、三五九―三八三頁、参照。

- (21) *Guillaume*, t. 1, p. 225; “Assemblée générale du 27 octobre”, *L’Égalité*, 30. 10. 1869.
(22) *Œuvres*, VI, p. 257.
(23) *Ibid.*, p. 277; *Guillaume*, t. 1, p. 226.
(24) 左近氏は、①の論文の三七六頁で「ウーチンをむりやり高く評価しようとする姿勢は、滑稽ですらある」と言い切っている。これに対し、次の文献のウーチン評価は高し。Woodford McClellan, *Revolutionary Exiles. The Russians in the First International and the Paris Commune*, London 1979.
(25) それぞれ『エガリテ』一八六九年の“Le Bulletin du Conseil général” (6. 11.); “L’organisation de l’internationale” (13. 11.); “Réflexions” (11. 12.) 参照。総評議会の決議に関しては『全集』十六巻、三七七頁、参照。
(26) “Chronique du travail”, *Le Progrès*, 4. 12. 1869.
(27) 『全集』十六巻、三七八―三八五頁。
(28) 前掲『マルタス伝』6、六七頁。
(29) “Historique de la société des Memusiers”, *L’Égalité*, 6., 13., 27. 11.; “Reclamation”, 11., 18. 12.;

- “Faits divers”, 25. 12. 1869.
- (30) *Guillaume*, t. 1, p. 252; *Œuvres*, VI, p. 249, n.
- (31) Cf. “Inauguration du monument élevé à Serno”, *L’Égalité*, 1. 1. 1870.
- (32) “Bibliothèque de l’Internationale de Genève”, *idem*, 16. 10. (林館通知); “À la commission de la bibliothèque”, 18. 12.; “Faits divers”, 25. 12. 1869.
- (33) “Aux sections romandes”, *idem*, 8. 1. 1870; *Guillaume*, t. 1, pp. 270-271.
- (34) *Riasanoff*, *op. cit.*, S. 185.
- (35) スレのこの手紙は一月四日付のヘンダグの私信で、ベルギーのドゥペーフに宛てた一月二四日付のマルタスの手紙にその抜粋が引用されている。*Marx Engels Werke*, Bd. 32, S. 642-643, 『全集』三二巻、五三〇—五三二頁。ただし訳文は「必ずしも『全集』には従っていない。
- (36) ギヨームもまた、ヌーシャテル支部は当時再結成されたばかりであったことを認めている。しかし、マルティノーが得た代議員証が公式のものであったかには言及していない。*Guillaume*, t. 1, p. 188. さらに『エカリテ』にも『プロダレ』にも、この期のヌーシャテル支部に関する叙述は見出せない。
- (37) Cf. *Guillaume*, t. 1, p. 189.
- (38) 『全集』三二巻、三四九頁、三五六頁、五三〇—五三二頁、参照。
- (39) 後のロンドン協議会「スイス問題委員会」で、同盟によるバーゼル大会への代議権偽造の問題にマルクスが言及したことも、彼がこの問題を重視したことを示している。Vgl. *Marx Engels Gesamtausgabe*, I-22, S. 297, 1151.
- (40) 『全集』三二巻、三八一頁。一方マルクスは、二月十二日にはこの事実をまだ知らなかった(同、三六二頁)。
- (41) *The General Council of the First International Minutes. 1868-1870, Moscow* (以下 *Minutes* と略示), pp. 219-220. 加入申請に関しては、同書註三〇九参照。
- (42) 註二四と関連し、ロシア人支部に対する左近氏の評価は低く、他方マクレーランの評価は高い。左近②「第一インターナショナルのロシア支部(1)」大阪市大文学部『人文研究』第二八巻、第十分冊、一九七六年。
- ③「同(2)」『同』第三〇巻、第十分冊、一九七八年。*McClellan, op. cit.*
- (43) 左近③二四—二八頁参照。マクレーランは、創立メンバーを「十二名ほど」としているが具体的な氏名を挙げている。McClellan, *op. cit.*, p. 98.

- (44) マルクスも非公開通知の中でそのことに触れている。『全集』十六巻、四一四—四一五頁。
- (45) 同、四〇一頁。この件に関するマルクスの手紙は、彼が依頼を引き受けた主な理由もまた反バクーニン闘争にあったことを示している。『同』三二巻、三八〇頁。
- (46) 前掲『マルクス伝』3、六七一—六九頁。
- (47) Cf. *Guilanne*, t. 1, pp. 263-268, 292-298.
- (48) 『全集』十六巻、四一三—四一四頁。一方次の手紙からは、一月一日の通知を書く時点ではマルクスがまだバクーニンがジュネーヴを去った事実を知らなかったことが分かる。『全集』三二巻、三四一—三四四頁。
- (49) “Procès-verbaux du Congrès Romand…”, *L'Égalité*, 23. 4. 1870; “Le Congrès Romand”, *La Solidarité*, 11. 4. 1870; *Guilanne*, t. 2, pp. 1-3. マルクスの史料が、なぜ代表数を「三七名」としてゐるのかははっきりしない。
- (50) 討議の叙述は次の史料による。“Procès-verbaux…”, *L'Égalité*, 23. 30. 4. 1870; “Procès-verbaux du Congrès romand”, *La Solidarité*, 11. 4. 1870.
- (51) “Compagnons rédacteurs du Progrès”, *Le Progrès*, 25. 12. 1869; *Guilanne*, t. 1, pp. 247-248. 「ノン
- リー派」に関して詳しくは拙稿②八〇—八二頁参照。
- (52) エンゲルスが、四月二一日付のマルクスへの手紙で、「ジュネーヴの諸君はまた、神さまのことなどわざわざ持ち出すことはなかったのに」と言っているのは、この二人の発言をめぐってである。『全集』三二巻、三九六頁。
- (53) 前掲左近①三六六頁、②十一頁、参照。
- (54) この文書に関しては Cf. *Guilanne*, t. 2, pp. 8-9.
- (55) ジュラ派の票数が一票少ないのは、ヌーシャテルの一支部から強制委任を受けた Ch. Baumann が、委任状に背じて反対派に回ったからであった。*Guilanne*, t. 2, p. 5.
- (56) *Ibid.*, p. 6.
- (57) “Résolutions du Congrès. VI.”, *La Solidarité*, 11. 4. 1870.
- (58) “Résolutions du Congrès”, *L'Égalité*, 16. 4. 1870.
- (59) “An die Bürger … biem Stuttgarter Kongress! Beschluß II”, *Der Volksstaat*, 15. 6. 1870.
- (60) 『全集』十七巻、六二二頁参照。
- (61) *Minutes*, pp. 224, 226.
- (62) そのため、五月の総評議会からの通知は『ヘガリテ』にのみ掲載された。*L'Égalité*, 14., 21., 28. 5. 1870.
- (63) *Minutes*, pp. 226, 256, 368; 『全集』十六巻、四二

- 二一四二三頁；*L'Égalité*, 13. 7. 1870；*La Solidarité*, 23. 7. 1870. 報告の執筆者がウーチンである点に関しては、マルクスの次の手紙参照。『全集』三二巻、三八六—三九〇頁。
- (64) 『全集』十七巻、四一六、四二五頁。
- (65) *Statuts pour la Fédération des Sections Romandes*；Art. 47. の問題に関しては、註三に挙げた古典のうちでカーのみが、代表するメンバー数の多さを根拠に実質上の多数派を主張しようとするジュネーブ派＝マルクス派の主張の不当性を「インターナショナルにおける票決は、支部のメンバー数に関係なく支部単位で行なわれることは周知であった」と指摘している（前掲『カール・マルクス』三三〇頁）。
- (66) 拙稿②七九—八二頁参照。
- (67) *Guillemé*, t. 1, p. 290.
- (68) リヨンのA・リシヤールに宛てたバクターニンの四月一日付の手紙 (*Bakunin-Archiv*, hrg. von A. Lehning u. a., VI, Leiden 1977, S. 276-282)；翌日付のキョーム宛の手紙 (*Guillemé*, t. 1, pp. 290-291) を参照。
- (69) 註四九に挙げた史料参照。
- (70) マルクスのこの主張は、註六三に挙げた手紙に始まり、これ以降「インターナショナルのい、わゆる分裂」等のパンフレット、および『全集』の註(例) 十六巻、註三二四)などに受け継がれてゆく。
- (71) 『全集』十六巻、四〇六頁。
- (72) “Le socialisme en Irlande”, *Le Progrès*, 11. 12. 1869.
- (73) *La Solidarité*, 23. 7. 1870；*Guillemé*, t. 2, pp. 56-59.
- (74) 註七〇で言及したマルクスの主張は、この党派性が生んだ「勇み足」であり、バーゼル大会で起こったことの敷衍のしすぎであった。なぜなら、そのような苦情は、悪口等とはかく、正式な形では反同盟派から寄せも出されなかったからである。Cf. *Guillemé*, t. 2, p. 22, n. 4.

(一橋大学助手)